

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

The birth of special renditions with Saxophone:
history of saxophone development and
consideration of repertoire

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菊地, 麻利絵, Kikuchi, Marie メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1167

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



サクソフォンと、特殊奏法の誕生 ——サクソフォンのこれまでの発展と、レパートリーの考察——

菊地 麻利絵

要旨

サクソフォンは、楽器製作者である、ベルギー人のアドルフ・サックス Adolphe Sax (1814-1894) が 1840 年代に開発し、1846 年に特許を取得した、比較的新しい楽器である。この楽器はおおまかに捉えれば 1930 年以降、とりわけサクソフォン奏者のマルセル・ミュール Marcel Mule (1901-2001) の活躍により、楽器構造的にもレパートリー的にも目覚ましい進化を遂げた。さらに、1970 年代以降、多様な特殊奏法がこの楽器のために考案されるに至り、サクソフォンは、現代音楽のなかに重要な位置を占めるに至っている。

本論考は、楽器としてのサクソフォンの発展と、この楽器のためのレパートリーの発展を照らし合わせることにより、サクソフォンが歩んだ、特殊奏法誕生への道のりを明らかにすることを目的する。

第1章では、楽器としてのサクソフォンの発展を正確に跡づけ、その発展史の骨格を提供することを試みた。その結果、ダブルオクターブキィの時代 (1844-1888)、シングルオクターブキィ誕生の時代 (1888-1936)、2つの低音キィの右手側配置 (バランスドアクション) の時代 (1936-54)、シーソー式テーブルキィ (マーク VI) の時代 (1954-現在) の、4つに分類させることができた。

それを踏まえ続く第2章では、楽器の発展とレパートリーとの発展を照らし合わせ、両者の関連を考察した。第1章で明らかにした楽器としてのサクソフォンの時代区分と共に、演奏可能となった奏法が増えていき、レパートリーが発展していったこと、そして 1954 年、「マーク VI」の発表を機にサクソフォンは「完成」されたことを明らかにした。

続く第3章では、「完成」されたサクソフォンから誕生した特殊奏法がどのようにして現れ、それに伴ってレパートリーはどのように変化していったのか論じた。その結果、特殊奏法はサクソフォンが「完成」される前から誕生していたが、広く一般化され、具体的にレパートリーの中で示されるようになったのは、エディソン・デニゾフ Edison Denisov (1929 - 1996) の《アルトサクソフォンとピアノの為のソナタ》が最初であることがわかった。この曲の特殊奏法は、その後も頻繁に用いられる奏法であり、楽器が「完成」されたからこそ追及することのできた奏法であるということを明らかにした。

The birth of special renditions with Saxophone: History of saxophone development and consideration of repertoire

Marie KIKUCHI

Abstract

The saxophone, having only being invented the 1840's by the Belgian instrument maker, Adolphe Sax (1814-1894), is a relatively new instrument in classical music. Since the 1930s, the saxophone made remarkable evolution in both structure and repertoire, mostly due to the legendary saxophonist Marcel Mule (1901-2001). Furthermore, since the 1970s, various extended techniques have been developed for the instrument, and now the saxophone occupies an important position in contemporary music. This thesis aims to clarify the development of the saxophone's extended techniques by comparing the development of saxophone as a musical instrument and with the development of its repertoire.

In Chapter 1, we will trace the development of saxophone as an instrument to provide a framework of its development history. Four distinct periods will be discussed: the period of double octave (1844-1888), the era of single octave-key birth (1888-1936), the era of the two right hand side placement of the bass key (balanced action) (1936-54), the seesaw type table, the era of the key (Mark VI) (1954 - present).

In Chapter 2, we will examine the relationship between the development of the instrument and the newly written repertoire. As performance style increased and repertoire developed, the saxophone's mechanics were developing in tandem. By 1954, with the announcement of the "Mark VI," the saxophone was now "completed."

In Chapter 3, we will discuss how the extended techniques with the "completed" saxophone and how the repertoire changed accordingly. Extended techniques were used before the saxophone was "completed", but it was widely generalized and shown specifically in the repertoire. Edison Denisov's (1929 - 1996), "Sonata for Alto saxophone and piano" proved to be the first major work written in this style for the modern saxophone. This sonata served as a catalyst for integrating extended techniques into many future works in the saxophone's vast repertoire.

サクソフォンと、特殊奏法の誕生

——サクソフォンのこれまでの発展と、レパートリーの考察——

菊地 麻利絵

キーワード：アドルフ・サックス アンリ・セルマー 特殊奏法

序論

本論考は、楽器としてのサクソフォンの発展と、この楽器のためのレパートリーの発展を照らし合わせることにより、サクソフォンが歩んだ、特殊奏法誕生への道のりを明らかにすることを目的する。

サクソフォンは、楽器製作者である、ベルギー人のアドルフ・サックス Adolphe Sax (1814-1894) が 1840 年代に開発し、1846 年に特許を取得した、比較的新しい楽器である。この楽器はおおまかに捉えれば 1930 年以降、とりわけサクソフォン奏者のマルセル・ミュール Marcel Mule (1901-2001) の活躍により、楽器構造的にもレパートリー的にも目覚ましい進化を遂げた。さらに、1970 年代以降、多様な特殊奏法がこの楽器のために考案されるに至り、サクソフォンは、現代音楽のなかに重要な位置を占めるに至っている。

楽器としてのサクソフォンの発展は、発明者が 1842 年に設立したアドルフ・サックス社の時代と、このアドルフ・サックス社を買収したアンリ・セルマー社の時代とに大きく二分されるが、その後の度重なるモデルチェンジのなかで、この楽器が具体的にはどのように変化したのか、また、その変化によってどのような音楽が可能になったのか、そして、その変化のうえに、どのようにしてこの楽器のための特殊奏法が現れてきたのか、現時点では、十分に検証されてはいない。

そこで、本論文は、まず第 1 章で、楽器としてのサクソフォンの発展を正確に跡づけ、その発展史の骨格を提供することを試みる。続く第 2 章では、楽器の発展とレパートリーとの発展を照らし合わせ、両者の関連を論じる。そして第 3 章では、さらに特殊奏法がどのようにして現れ、それに伴ってレパートリーはどのように変化していったのか論じたい。

第 1 章 楽器としてのサクソフォンの時代区分

すでに序論で述べたように、楽器としてのサクソフォンは、大きくみれば、アドルフ・サックス社の時代と、それを買収したセルマー社の時代に二分される。しかし、楽器の発展とレパートリーの発展とを照らし合わせようとする本論文において、この区分は、あま

りに大雑把である。そこで、第1章では、楽器としてのサクソフォンの発展はいくつに区分されるのが適当かを、まず検証しておきたい。

現在までのところ、楽器としてのサクソフォンの発展について意義ある時代区分を提供しているのは、宮崎真一¹が管楽器専門月刊誌『パイパーズ』に寄稿した記事が唯一である。宮崎は、2003年の8月号から10月号の各号に「サクソフォンの3世代」としてサクソフォンの発展を3期に分けそれぞれ「第1期年表」「第2期年表」「第3期年表」を掲載している（宮崎 2003a: 27; 2003b: 19; 2003c: 21）。

ここでその概要を示すならば、宮崎のいう「第1期」は1814年から1894年までで、これはサクソフォンの発明者であるアドルフ・サックスが誕生してから没するまでにあたる。「第2期」は1873年から1941年までで、これは、アメリカでサクソフォンが初めて取り入れられた時から、シガード・ラッシャー Sigurd Rascher (1907-2001) が『Top Tones』を出版するまでにあたる。「第3期」は1941年から2002年までで、これは「第2期」終了と同時の『Top Tones』出版からダニエル・デファイエ Daniel Deffayet (1922 - 2002) が没するまでにあたる。「第1期」と「第2期」の年数が重なっているのは、「第2期」の発展の中心はアメリカであったこと、「第1期」の区切りとして最適なのはアドルフ・サックスが没した年だと判断したからだろう。「第3期」が2002年までなのは宮崎の原稿執筆時において考慮しうるのが、この年までだったからである。

宮崎区分の問題点

しかし、楽器としてのサクソフォンの発展と、この楽器のためのレパートリーとの発展を関連付けようとする本論考にとって、この宮崎区分は必ずしも有効なものといえない。

その大きな理由は、本論考が必要とする楽器の構造的な発展の外にある雑多な要素が、この区分のなかに入り込んでいることである。それは例えば、世界大戦や株価暴落などの社会的な事柄、また例えば、チャーリー・パーカーやマイケル・ブレッカー生没などのジャズ奏者への目配り、また例えば、パリ音楽院、東京藝術大学など音楽教育機関におけるサクソフォン科の開設（それぞれ1942年と1953年）、また、例えば、発明者であるアドルフ・サックスの生い立ち等、また例えば、様々なサクソフォン製造会社の羅列的記述などである。

このように、宮崎区分は上述のような雑多な情報が混在しているために、区分に統一感を欠く結果となっている。実際、「第1期」はアドルフ・サックスが誕生した年から始まり、没した年に終了しているが、「第2期」はアドルフ・サックスが没する前から始まっており、さらにヨーロッパではなくいきなりアメリカの情報から始まる。アメリカで初めて楽団にサクソフォンが取り入れられる情報から「第2期」が始まっているが、「第3期」では、サクソフォン作品の作曲情報から始まる。

よって、本論考にとっては、あくまでもサクソフォンの構造的発展という統一的な視点からなされる新たな区分が必要となる。

¹ 宮崎真一 (1970-) は、楽器史研究家、サクソフォン奏者。サクソフォンにおける楽器史について特に高い知識を持ち、『パイパーズ』や『The Sax』などに定期的に寄稿、講義を行っている。

世代分け検討

楽器としてのサクソフォンの構造的発展に、もっとも直接的な影響を及ぼすのは、この楽器のキィシステムであるに違いない。そこで、このキィシステムの変化を基準として、サクソフォンの世代分けをしてみると、次のようになる。

第一世代：ダブルオクターブキィの時代 (1844-1888)

第二世代：シングルオクターブキィ誕生の時代 (1888-1936)

第三世代：2つの低音キィの右手側配置（バランスドアクション）の時代 (1936-54)

第四世代：シーソー式テーブルキー（マーク VI）の時代 (1954-現在)

サクソフォンの第一世代は、当然ながら、アドルフ・サックスによるサクソフォンの発明に始まる。彼がこの楽器の特許を取得するのは1846年のことであるが、サクソフォンの歴史は、その2年前の1844年にはじまっていると考えられる。なぜなら、この年に、アドルフ・サックスの依頼により、エクトル・ベルリオズ Hector Berlioz (1803 - 1869) は、自身の合唱曲《神聖なる歌》をサクソフォンを含むかたちに編曲し、アドルフ・サックス自ら、このパートを演奏しているからである。これは、サクソフォンがはじめて公開の場で演奏された機会であった。

この時点でのサクソフォンのキィシステムは、現在のサクソフォンのキィシステムとかなり異なっていた。まず、音孔の数が、現在の25に対して18と少なかったこと、その結果、現在では当然のように使用している「変え指」がこの時代の楽器構造では使用できず、正規の運指しかなかった。そのため、特に音程の調整が難しかった。さらに、キィと指の接触部分の面積が現在のものの約半分と小さい上に、指のポジション移動のためのローラーである「シャフト」も欠けていたこと、その結果、滑らかなポジション変更がしづらかった。また、キィを押すのに要する力にもばらつきがあったこと、そのため、統一された力加減で操作できなかったこと。そして、決定的な違いとして、オクターヴキィがふたつに分かれていた、つまり、中音域と高音域でオクターヴキィの種類が変わっていたこと、その結果、走句の際、現在では要求されない左手親指のポジション変更が要された。以上の違いから、この時点でのキィシステムは、その操作性において、現在のものよりもだいぶ劣っていたといえる。

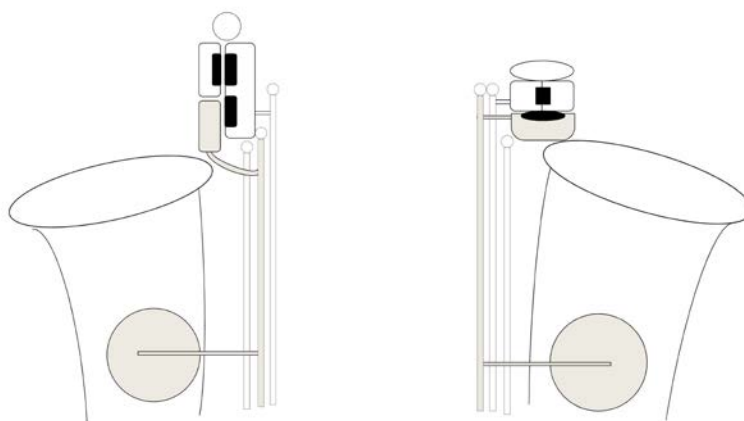
第二世代は、ルコント Lecomte 社によるシングルオクターヴキィの発明にはじまる。この仕組みは、中音域も高音域も、1つのオクターヴキィで自動で切り替えられるようにしたもので、キィシステムの操作性の改良に決定的な役割を果たした。

この発明が可能になったのは、すでにアドルフ・サックス社の所有するサクソフォンの特許が1866年に失効し、1860年に設立された新興のルコント社が、この楽器の製造に参入できたからである。ルコント社は、1888年にシングルオクターヴキィの15年の特許を取得し、アドルフ・サックス社も、おそらくは、この特許が失効した後（1903年）に、同じ仕組みを取り入れたと思われる。実際、1907年には、アドルフ・サックス社でも、シン

グルオクターヴキィのサクソフォンが製造されていたことが確認できる²。

第三世代は、セルマー社による「バランスドアクション」の発表にはじまる。セルマー社は1922年にサクソフォンの製造を開始した楽器製造社であり、1928年にアドルフ・サックス社を買収、そして、1936年に、この「バランスドアクション」を発表した。それに先立つアドルフ・サックス社の全サクソフォン、また、セルマー社についても、「モデル 22」（1922年発表）から「ラジオインブルーブド」（1934年発表）までのサクソフォンにおいては、低音2つの音孔はベル左手側にあった。しかし、この「バランスドアクション」において、これら2つの音孔が、その他の音孔と同じくベル右手側へ移動した。

【図1】（左）「バランスドアクション」以前のテーブルキィ
（右）「バランスドアクション」のテーブルキィ
（網目で示したものが、最低音 B $\flat$ 、黒い部分はシャフト）



これがなぜ重要かというと、2つの音孔がこのようにベルの右手側にくることにより、それを左手で操作するテーブルキィの形状の改良が可能になったからである。これには若干の説明が必要であろう。まず、低音2つの音孔が左手側から右手側に移動するにともなって、これらの音孔を開閉するキィとこれら进行操作するテーブルキィとを繋ぐ連結バーは、いまや二番管とベルとの間に配置されることになる。二番管とは、操作するためのキィが集結している直管部分のことで、これまで、最低音 B $\flat$ の連結バーは、【図1】（左）のように、左手小指から近すぎたため、キィが遠くに配置された上に縦長であったが、このシステムにより、最低音 B $\flat$ の連結バーが左手小指から遠くなった。その結果、縦長であった最低音 B $\flat$ キィは、横長に変化した【図1】（右）。

これにより、かつては縦長であったテーブルキィの形状を、楕円型に整形できるようになり、これがテーブルキィをより小さな力で操作可能にした。左手小指で操作するテーブルキィは、縦長であるよりも、楕円型であるほうが小指の移動を小さく抑えることができ、断然に操作しやすい。この低音キィの右手側配置でセルマー社は30年の特許を取得した。

第四世代は、その後セルマー社の中でも特に長い間製造され続けた「マーク VI」（1954年発表）からであると考えられる。なぜなら、この「マーク VI」で、現在のサクソフォン

² 愛知県名古屋市の楽器店「ガレージエス」提供資料参照。（「第33回サクソフォーン・フェスティバル」（2017年2月）時に頒布されたもの。）

は完成されたと言っていいものだからである。その理由として、この「マーク VI」は、第三世代で改良されたテーブルキィに、さながら連動システムを導入し、さらに軽い力で低音同士を連結する（→低音キィを操作する）ことを可能にしたからである。また右手親指で楽器を支えるサムフックも、これまでの固定式から、現在の主流となる可動式に変わった。これにより、奏者のどのような手の大きさにも対応できるようになった。左手親指で操作するオクターブキィもオール型から木葉型へと形状が改良され、それによって、これまで真上に構えていた左手親指を、より自然な手の形にそって構えることができるようになった。このオクターブキィの形状でもまた、セルマー社は特許を取得する。

では、次の第2章からは、アドルフ・サクスが発明し、ほぼ現在の形となる「マーク VI」までの、第一から第四世代までの過程と、それによりレパートリーがどのように変化していったのか、双方を照らし合わせて検証しよう。

第2章 サクソフォンの発展とレパートリー

2-1 第一世代「ダブルオクターブキィの時代（1844-1888）」のレパートリー

すでに述べたように、サクソフォンがはじめて公式に取り入れられたのは、ベルリオーズの合唱曲《神聖なる歌》の編曲（1844年）においてであった。しかしこの編曲が、現在演奏されることはまずない。楽譜も出版されないまま紛失し、ただ文献上に記録が残るだけだからである。当時まだ、特許取得前の発展途上の楽器にすぎなかったサクソフォンのためのレパートリーを作り上げようとする意識が希薄であったとしても、不思議ではない。実際、このころのサクソフォンは、すでに第1章で述べた通り、現在に比べ構造的にだいぶ劣っていた。³

サクソフォンの世界において、現在でも演奏される楽曲としては、まず、ジャン＝バティスト・サンジュレー Jean-Baptiste Singelée (1812-1875) が 1857 年に作曲した《サクソフォン四重奏曲 作品 53》があげられる。この曲は、アドルフと親交の深かったサンジュレーが、今日におけるサクソフォン四重奏の形態、ソプラノ (in B♭)、アルト (in E♭)、テナー (in B♭)、バリトン (in E♭) の四種類のサクソフォンを使用することを確立したという意味で、現在でも大切に扱われるレパートリーでもある。

³ 今回この論文作成に当たり、ブルース・ロンキン Bruce Ronkin (1957-) 著の「*Répertoire Londeix de musique pour saxophone*」を参照し選出した。これはサクソフォンのために、1844年から2012年までの間に作曲された作品を一覧にしたもので、29000もの作品があることを示している重要な資料である。この一覧を差し込むことは不可能なので、現在でも重要なレパートリーとなっている作品で、かつ、楽器構造の発展とともに可能となった記譜法を示している楽曲を選んで、考察の対象とした。

この作品をきっかけとして、(黎明期には存在していたC管やF管サクソフォンが駆逐され)ソプラノからバリトンまでの四種類のサクソフォンが主流となったが、楽器としては不安定な時期であった。「操作がしやすく、木管楽器と金管楽器の間のような音色であり、音量が出る楽器である」(Rorive 2004: 51)と、アドルフが売り出して人気となったサクソフォンだが、この時期のサクソフォンは楽器自体が小さく、そこまで大音量とは言えないこと、第1章で述べた通り音孔も18と、現在の23と比べよりシンプルなつくりのため音程も悪かった。とりわけ、臨時記号に弱い構造であったため、走句であったとしても、楽譜上は【譜例1】のアルト、ソプラノパートのように、臨時記号の少ないかなりシンプルな作りであった。

【譜例1】

The image shows a musical score for Soprano, Alto, Tenor, and Baritone saxophones, and Soprano, Alto, Tenor, and Baritone voices. The score is in 4/4 time and features complex melodic lines with many accidentals. The Alto and Soprano parts are marked 'poco'.

この時期の楽曲として、もう一曲とりあげるべきはジュール＝オーギュスト・ドゥメルスマン Jules-Auguste Demersseman(1833-1866)の、《オリジナルの主題による幻想曲》である。なぜなら、サクソフォンが開発されてから、他楽器の作品をこの楽器用に編曲することが多かったのだが、この曲は、はじめからサクソフォンのために書かれたピアノ伴奏付きのソロ曲だからである。作曲された年は1860年であるので、サンジュレーとほぼ同世代となる。サンジュレーもソロ曲を多く残しているのだが、この曲は技巧的な作品である。半音階で駆け巡るパッセージや、音域を最大限活用した旋律は、当時のダブルオクターブキィシステムのことを考えると、かなり難易度が高かったことが予想できる。なぜなら、【譜例2】のように、多くの走句が指示され、二つのオクターブキィを使用する中音域、高音域を多用している。ドゥメルスマン自身もサクソフォンという楽器に期待を寄せていたということも考えられるだろう。

【譜例2】カデンツァ部分からの抜粋 ---- は第一、—— は第二オクターブキィを用いる

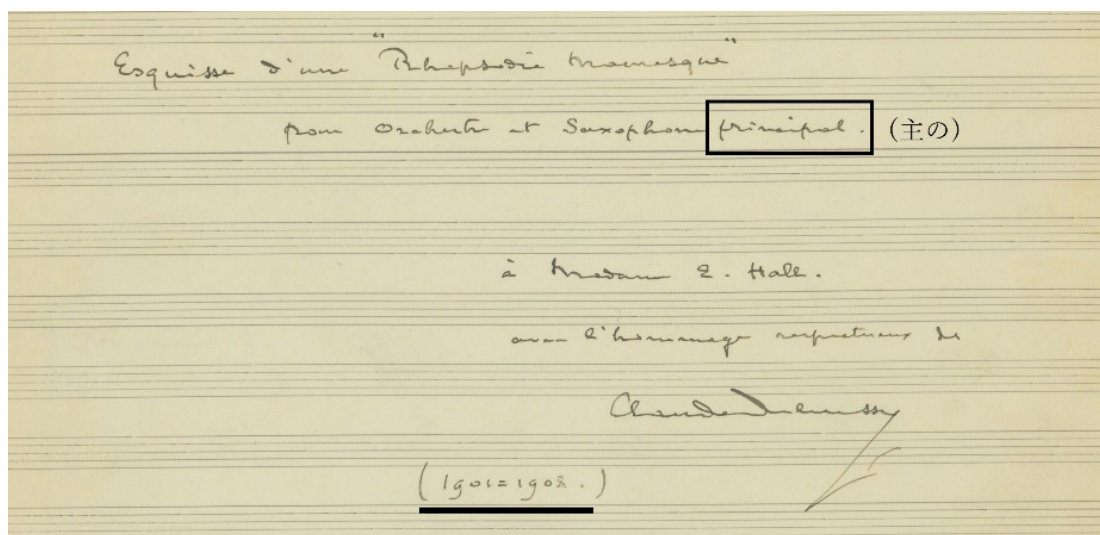
The image shows a musical score for a cadenza section, showing two staves. The top staff is marked 'Rall.' and the bottom staff is marked 'Tempo'. The score features complex melodic lines with many accidentals and dynamic markings.

2-2 第二世代「シングルオクターブキィの誕生の時代（1888-1936）」のレパートリー

第1章でも述べたが、1888年にルコント社がシングルオクターブキィを開発してから中音域と高音域の行き来というのが格段にし易くなった。それと同時に、臨時記号にも対応できるよう、少しずつキィが増えていった。しかしこの時代、アメリカでのジャズの楽器としてのサクソフォン人気が高まったのに反して、フランス、ヨーロッパ内でのサクソフォン人気は低迷していた。ではその低迷期の間、この楽器のレパートリー史において重要な楽曲は残されたのだろうか。

1900年頃、クロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918) は、サクソフォンのための楽曲をアメリカのエリズ・ホール Elise Hall (1853-1924)⁴から委嘱され、《狂詩曲》を作曲し始めた。しかし、右の【図2】下部に書かれている通り、作曲年数は1901年から1908年であり、完成までに8年もの年月をかけている。その要因として、ドビュッシーはサクソフォンについて知識を得ていなかったこともすでに論じられているが(佐藤 2013: 46)、この頃のサクソフォンは、ドビュッシーの考えるソロ楽器とは少し違っていたのではないか。自筆スケッチタイトルによると、複数人のアンサンブルの際、「主席奏者」という意味で用いる「Principal (主の)」という言葉が使用されている。

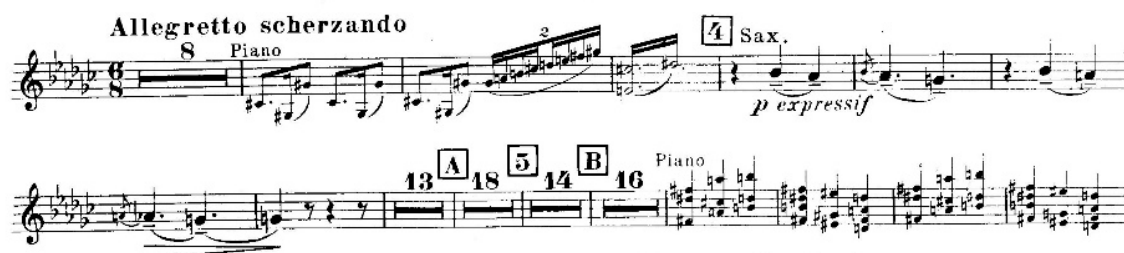
【図2】



⁴ エリズ・ホール Elise Hall (1853-1924) は、富豪の妻でありアマチュアサクソフォン奏者。アメリカやフランスで演奏会を開き、女性サクソフォン奏者としてだけでなく、ドビュッシーやフローラン・シュミット Florent Schmitt (1870-1958)、現在でも演奏されるレパートリーの委嘱者でもあった

《狂詩曲》の原典版の旋律には、走句の部分が極端に少ない【譜例3】。1900年代に入り、操作性が向上したサクソフオンは、当時の構造では作曲者の求める音楽を自由に表現できるとまでは言えなかった、ということも伺える。なぜなら、この曲の進行は、静寂のうちに始まったのち徐々に音楽が展開していく曲なのだが、曲が始まって初めての展開部分である【譜例3】のサクソフオンパートは練習番号4番の5小節間以外はすべて休符である。

【譜例3】



現在は様々な奏者がこの曲の改版を訂出版しており、休符だった部分は書き直され、ほぼサクソフオン協奏曲として直されている。例えば、【譜例3】、練習番号A部分は長休符であるが、ヴァンソン・ダヴィット Vincent David (1974-) が改訂した楽譜【譜例4】には、練習番号A、二小節目から、倍音を用いて通常の音域を越えた高音を出す奏法、フラジオ奏法（フラジオレット、ハーモニクス）が用いられている。

作曲された当時のサクソフオンでは、音孔の数も足りず、十分な倍音が鳴っていなかったため、このようなパッセージを演奏することはまず不可能だったと考えられる。他者による度重なる改訂はある意味、サクソフォンの構造的な発展、ならびに、それに応じたソロ楽器としての認知度の向上にともなう、必然的なものだったのだろう。

【譜例4】



第二世代が終わる直前の1935年、ジャック・イベール Jacques Ibert (1890 - 1962) の《室内小協奏曲》が初演されている。この曲も、第一世代のドゥメルスマン同様、低音から高音まで、音域を最大限使用した楽曲であるのだが、ドゥメルスマンの時代とは違い、ダブルオクターブシステムでないこと、臨時記号にも対応できる構造になったということが、【譜例5】の走句の多さ、臨時記号の出現回数から読み取れる。

【譜例 5】



2-3 第三世代「2つの低音キの右手側配置（バランスドアクション）の時代（1936-54）」のレパートリー

序、第1章で述べた通り、アドルフ・サックス社はアンリ・セルマー社に買収されるのだが、セルマー社の名が知られたのは買収された1928年でなく、「バランスドアクション」が発表された1936年である。第1章で述べた通り、バランスドアクションは以前のモデルより、小指にあたる面積が狭くなっていて、小指を大きく縦移動しなくて済むことがわかる。テーブルキの形状が改良され、低音への抵抗というものが減ったのだ。

以前であれば、B または B $\flat$ 単音へ行きつく旋律であること、出現箇所もわずかであればそれほど難しいものではなかった。しかし、クロード・パスカル Claude Pascal (1921 -) の《アルトサクソフォンとピアノのためのソナチネ》は1948年初演の楽曲であるが、曲中には低音B及びB $\flat$ （ここではA $\sharp$ ）の二音が並んでいる個所が度々登場する【譜例6】。

【譜例 6】



《ソナチネ》のカデンツァ部分には、B または B $\flat$ （A $\sharp$ ）の二音が並んでいる個所があり、左手小指の負担が重いと中々難しい運指である。「バランスドアクション」に比べて、キの形状が縦長で、B、B $\flat$ の間にローラーであるシャフトがついていない「モデル22」では、運動量も多くなるのは一目瞭然である。【譜例6】も、セルマー社が開発した、左手小指の負担を軽減し、キの形状も大幅に変更したゆえに可能となった記譜であるのは明らかである。

2-4 第四世代「シーソー式テーブルキィ（マーク VI）の時代（1954-現在）」のレパートリー

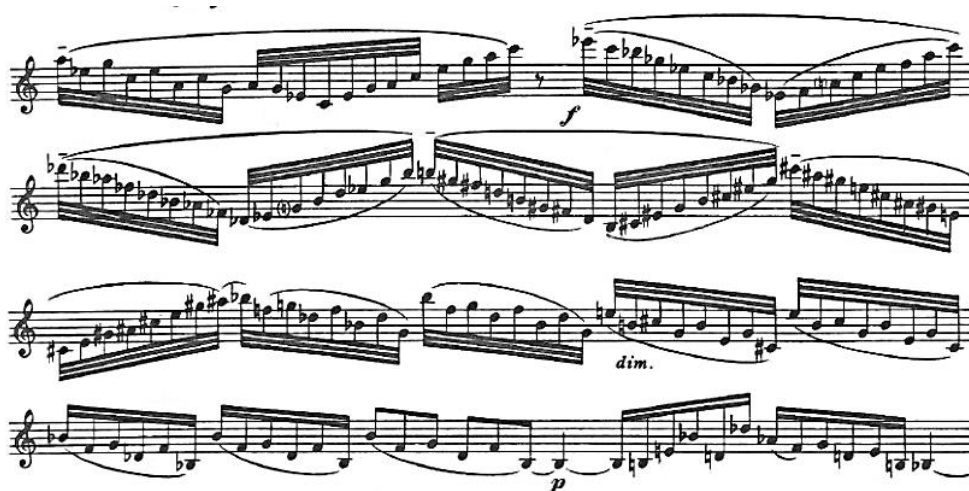
第1章で明らかにしたように、第四世代のサクソフォンによって、テーブルキィの連結が円滑化され、オクターブキィの形状改良がなされた。

この改良があったこそこのパッセージが、アルフレッド・デザンクロ Alfred Desenclos (1912 - 1971) の《プレリュード、カダンスとフィナル》(1963年)に見つかる。

【譜例 7】は、この作品の「カダンス」部分からの抜粋である。ここに見られるアルペッジョは、高速で高音域から低音域までを駆け巡るものであり、これを演奏するには難易度の極めて高い運指を行わなければならない。以前までのモデルを思い起こせば、高速でこの旋律を演奏することは指に大きな負担がかかることが想像できるはずだ。アドルフ・サクスの時代には 18 しかなかった音孔は、「マーク VI」の時代には 24 に増えた。これにより何が変わったのかというと、音孔の数が増えたことでどの音階にも対応可能となり、すべての音域へ跳躍できるようになった。

セルマー社が重ねてきたモデルチェンジにより、他の旋律楽器にも負けない運指、音域を確立した。特許を取得してから約 100 年で、技術的には申し分ない構造へと発展し、楽器として「完成」されたと言えることができる。完成されたサクソフォンの特徴として思い浮かばれるのは、音量の幅、運指の容易さなど、様々である。

【譜例 7】



第3章 サクソフォンの特殊奏法の誕生

このような「マーク VI」というかたちでの、楽器としてのサクソフォンの完成を下地にしてこそ、様々な特殊奏法が生まれてくることになる。

そもそも特殊奏法とは何かということが問題になるだろう。実際のところ、特殊奏法の理解は、通常の奏法が何かということと相関関係にあるのであって、それ自体を定義することは、きわめて困難である。そこで、まずは著名なサクソフォン奏者、ジャン＝マリー・

ロンデックス Jean-Marie Londeix (1932-) が、自身のサクソス教則本『*Hello! Mr. Sax*』の序において記した、次の言葉を引用することからはじめたい。この『*Hello! Mr. Sax*』は 1989 年に出版され、以来、サクソスを専門的に扱う音楽家たちに、もっとも広範な影響を及ぼしてきた著作である。

[サクソフォン]による表現がもっとも強い意味でオリジナルであるのは、その強弱のニュアンスの幅広さと柔軟さゆえであり、また、音色の多様性ゆえであり、また、アタックの種類の多さゆえである。さらに重要なのは、サクソスを用いれば、大きな音程を演奏するのも、通常の音高を外れた音を演奏するのも、微分音、重音、ハーモニクスを聞かせるのも、また、[リードを使わず]楽器自体を鳴らしてえられる特異な音や騒音を聞かせるのも、驚くほど容易だ、ということである。(Londeix 1989: 1)

いま引用した記述は 2 文から構成されているが、その前半の文章がサクソフォンの通常の奏法の可能性を記したものと捉えられるのに対して、後半の文章はサクソフォンの特殊奏法の可能性を記していると捉えられる。そして、著者のロンデックス自身が言明するように、この『*Hello! Mr. Sax*』が「マーク VI」以降の楽器の使用を前提 (Londeix 1989: 2) として書かれていることを鑑みると、前者の可能性は「マーク VI」の登場に向けて段階的に高まっていったものであるのに対し、後者の可能性は、「マーク VI」の登場によって、はじめて実用レベルで（つまりは、「驚くほど容易」に使用できるものとして）考慮されるようになったものと考えられる。

そこで、本章では、これらの「大きな音程」「通常の音高を外れた音」「微分音」「重音」「ハーモニクス」を実際に響かせる奏法として、フラジオ奏法、微分音奏法、重音奏法の 3 つを取り出し、これらをとくに「マーク VI」とともに可能になった、サクソフォンの「特殊奏法」に位置づける。上記の引用で、ロンデックスはさらに「特異な音や騒音」にも言及しているが、これは楽器の構造的進化と直接的に関係するものではないため、本論文では除外するのが適当であろう。

また、以下の論考では、もっぱらエディソン・デニゾフ Edison Denisov (1929 - 1996) の《アルト・サクソフォンとピアノのためのソナタ》を、これらの実践例として検証する。ロンデックス自身は、『*Hello! Mr. Sax*』の重音を解説した項目のなかで、この作品を「重音を使用するサクソフォンのための最初の重要な芸術音楽作品」(Londeix 1989: 31) と述べている。しかし、佐藤淳一も指摘しているように、現実には、デニゾフの《ソナタ》は、もっと包括的な意味で、サクソフォンの特殊奏法の原点である (佐藤 2007: 74)。デニゾフの《ソナタ》には、その後、頻繁に用いられることになる特殊奏法のすべてが現れている。⁵

⁵ 両者が出会ったのは、モスクワに演奏旅行に訪れに、ロンデックスがデニゾフ宅に招かれたときのことであった (1970 年 3 月 24 日)。モスクワ滞在中に、ロンデックスはデニゾフの作品に興味を持ち、デニゾフはロンデックスの披露する特殊奏法に感銘を受けたという。ボルドーに戻ったロンデックスは特殊奏法を録音したテープを送るとともに、デニゾフにサクソフォンのための新作を委嘱する。こうして出来上がったのがこの《ソナタ》であった (須々木 2011:93-99)。

フラジオ奏法（フラジオレット、ハーモニクス）

サクソフォンの特殊奏法の始まりは、第2章で記したフラジオ奏法（フラジオレット、ハーモニクス）である。フラジオ奏法は、特殊な運指を組み合わせることにより第2、第3倍音を浮き立たせる奏法である。もちろん、フラジオ奏法自体は、すでに1900年代前半には存在していた。しかし、当時は、まだ誰もが利用できるような奏法ではなかった。このフラジオ奏法は、あくまでも楽器が「完成」されてから普及し始めたものである。

例えば、1935年のイベールの《小協奏曲》は、ドイツ人でありアメリカで活躍した奏者、シガード・ラッシャー Sigurd Rascher (1907 - 2000) のために献呈された。フラジオの名手であった彼は、【譜例8】のように、フラジオ奏法が要求される箇所、アドリブ（アドリビティウム）表記部分はフラジオで演奏していた。しかしこれが誰もが演奏できるものではなかったことが、アドリブ表記されていることから伺える。ラッシャーのライバルであった名手ミュールでさえも、（正規の運指を用いない奏法を嫌っていたこともあるが）フラジオ部分を演奏しなかった。対し、【譜例9】のデニゾフ《ソナタ》には、アドリブの表記なしにフラジオ奏法が求められる音域が登場する。現代奏法の名手、ロンデックスのために作曲初演された曲であるが、この時代、ほかの奏者も果敢に挑戦していた。つまり、共有される「奏法」以前であったフラジオ奏法が、今や特殊ではあれ、しっかりとした「奏法」となったことが伺える。これによりフラジオは、マーク VI までで完成したのちに確立した奏法であると言える。

【譜例8】



【譜例9】



微分音奏法

微分音奏法とは、サクソフォンの正規の運指に、さらにキィを足す、または減らす、あるいは、正規の運指とは異なる特殊な組み合わせを用いることによって、半音以下の音程を作り出す奏法である。より現実的には、（半音の半分にあたる）四分音や、（四分音のさらに半分にあたる）八分音が求められることが多い。

開発直後のサクソフォンは、第1章でも述べたように、18しか音孔がなく、微分音を出

すための「変え指」は不可能であった。そして、その後のモデルにおける音孔の増加も、不安定であった音程、そして運指の改善を図るものであって、決して、微分音を出すためのものではなかった。しかし、こうした音高の安定性がえられた後に誕生した「マーク VI」において、サクソフォーンは 24（その後音域が広がり 25 になる⁶）の音孔を備えるように至り、はじめて、微分音奏法が、奏法としての地位をえることになる。デニゾフ《ソナタ》の第二楽章では、【譜例 10】のように、始めに注意書きがある。

【譜例 10】

SAXOPHONE Alto Mi $\flat$

$\flat = \frac{3}{4}$ de ton plus bas $\flat = \frac{1}{4}$ de ton plus bas
 $\sharp = \frac{3}{4}$ de ton plus haut $\sharp = \frac{1}{4}$ de ton plus haut [C] =

Lento (♩ = 40) **II**

The musical score is for Saxophone Alto Mi $\flat$. It begins with a tempo marking of Lento (♩ = 40) and a section marker II. The notation includes a treble clef and a key signature of one flat. Fingerings are indicated by circled numbers: ①, ③, ④, and ⑤. A key signature change to D sharp is indicated by a sharp sign. Dynamics include piano (p), pianissimo (pp), and espressivo. Interval markings of 5:4 are shown between notes. The score is written on a single staff.

重音奏法

サクソフォンは、正規の運指を使う限り、単音しか発することが出来ない。しかし、特殊な運指を用いることにより、倍音を多数浮き立たせ、複数の音を同時に響く状態を作り出すことができる。こうして複数の音を同時に響かせる奏法を重音奏法という。重音奏法の指定の仕方は作曲者によって様々ではあるが、デニゾフは、数字でサクソフォンの運指を指示する方法を取っている（【譜例 10】の一音目参照）。ここでは、①に左手人差し指、③に左手薬指、④に右手人差し指、⑤に右手中指、D $\sharp$ は、右手小指で操作するキィを押さえることを示す。

このように指示されてはいるが、実際は運指のほかに息の量や、サクソフォンの歌口であるマウスピースの噛み具合、舌の位置など、様々なことを気をつけなければならない。音孔の数だけを見れば、「マーク VI」以前の楽器でも演奏可能であったかもしれないが、これも、サクソフォンの完成されたからこそ誕生した奏法である。なぜなら、「マーク VI」で改善されたキィ操作の円滑さ、より体の負担を軽減させたシステム、これらを気にしては、通常とは異なる運指、マウスピースをわざと噛むなど、普段行わない奏法など追及することさえできなかったと考えられるからである。

まとめ

サクソフォンは、開発社アドルフ・サックス社から始まり、途中ルコント社の特許取得もあったが、買収し改良を重ねてきたアンリ・セルマー社が存在しなければ「マーク VI」

⁶ サクソフォンの音孔は、アドルフ・サックス社の時代で既に増加し続けていた。セルマー社に買収された時点で 24 あり、「マーク VI」が出るまでその数は安定していたが、「マーク VI」が発売された時代の途中から楽器の音域の拡大が図られ、その後 25 で安定した。現在でもこの 25 が主流となっている。

までで完成しなかったものである。度重なるモデルチェンジのなかで、特に「バランスドアクション」におけるキィシステムの改良は、その後、すべてのサクソフォンに採用された重要なシステムであり、それに伴いレパートリーが飛躍的に発達していったのである。また、レパートリーの発展があったからこそ、楽器の構造というものもその後発達をし続け、「マーク VI」までたどり着き、サクソフォンが「完成」されたのである。

そして、「マーク VI」でのキィシステム、より体の負担を軽減させるシステム、それに伴う吹奏感、これらに不備があつては考察できなかった技術が、「特殊奏法」として、楽器構造とは別に実践化されていった。特に現代音楽の場面で演奏され、ロンデックスによる特殊奏法の確立化、デニゾフと出会わなければ作曲されなかった《ソナタ》の存在は、これまでになかった特殊奏法を含む初めての芸術的作品として、新たな時代を切り開いた。つまり、セルマーの「マーク VI」で完成されたからこそ誕生した、新たな世代というものが現れたのである。

参考文献

New England Conservatory

n.d. Debussy's Esquisse d'une Rhapsodie (『New England Conservatory』)
<https://www.flickr.com/photos/27770344@N02/sets/72157622623199855/>

Londeix, Jean-Marie

1989 *Hello ! Mr.Sax.* (Paris : A.Leduc)

宮崎 真一

2003a 「サクソフォンの3世代」『パイパーズ』22/12, 26-29

2003b 「サクソフォンの3世代」『パイパーズ』23/1, 18-22

2003c 「サクソフォンの3世代」『パイパーズ』23/2, 20-24

Perrin, Marcel

1977 *Le Saxophone, son histoire, sa technique, son utilisation dans l'orchestre.*
 (Provence : Aujourd'hui)

Ronkin, Bruce

2012 *Répertoire Londeix de musique pour saxophone, 1844-2012.* (Northeastern : Roncorp)

Rorive, Jean - Pierre

2004 *Adolphe Sax (1814-1894) - Inventeur de génie.* (Bruxelles : Racine)

Rousseau, Eugene

1982 *MARCEL MULE. Sa vie et le saxophone.* (Paris : A.Leduc)

佐藤 淳一

2007 「サクソフォン現代奏法」『パイパーズ』27/11, 74-75

2013 「クロード・ドビュッシー《ラプソディ》を巡る諸問題に対する考察—Elise Hall という淑女を讃えて」『日本サクソフオーン協会報』24, 31-89

n. d. 「サクソフォンの現代奏法の誕生とロンデックスの功績」(『SaxoLab.』HP

内) http://saxolab.net/web/Works_contemporary_sax_contemporay.html (2017 年
7 月参照)

須々木 由子

- 2011 「デニーソフ作曲《アルトサクソフォンとピアノの為のソナタ》曲目分析」
『日本サクソフォン協会報』23,87-110

Thiollet, Jean-Pierre

- 2004 *SAX, MULE & CO. Marcel Mule ou l'éloquence du son.* (Malesherbes : H&D)

Whitston, Declan

- 1996 「The history of the saxophone with an analysis of selected music by Escudie,
Glazounov, Creston and Dwyer.」 (Music from University College Cork)

楽譜資料

Debussy, Claude

- 1919 *Rapsodie pour Orchestre et Saxophone.* (Paris : Durand)

Debussy, Claude (David, Vincent 編)

- 2001 *Rhapsodie pour orchestre et saxophone.* (Paris : Lemoine)

Demersseman, Jules Augustes

- 1994 *Fantasie Sur un thème original.* (Bressuire : Fuzeau)

Denisov, Edison

- 1973 *Sonate pour Saxophone Alto et piano.* (Paris: A.Leduc)

Desenclos, Alfred

- 1956 *Prélude, Cadence et Final pour Saxophone Alto et piano.* (Paris : A.Leduc)

Ibert, Jacques

- 1935 *Concertino da camera pour Saxophone Alto et Onze instruments.* (Paris : A.Leduc)

Pascal, Claude

- 1948 *Sonatine pour Saxophone Alto et piano.* (Paris : Durand)

Singelée, Jean-Baptiste (Londeix, Jean-Marie 編)

- 1977 *Premier Quatuor, op.53.* (Wormerveer : BV)